

芥川龍之介

点心



点

心

御降り

今日は御降りおさがである。尤もつとも歳事記を検べて見たら、二日は御降りと云わぬかも知れぬ。が蓬菜ほうらいを飾った二階にいれば、やはり心もち御降りである。下では赤ん坊が泣き続けている。舌に腫物はれものが出来たと云うが、鵝が口瘡こうそうにでもならねば好い。じつと炬燵こたつに当りながら、「つつづらふみ」を読んでいても、心は何時かその泣き声にとられて、私じゆんきよの家は鶉居じゆんきよではない。娑婆

界の苦勞は御降りの今日も、遠慮なく私を悩ますのである。昔或^{ある}御降りの座敷に、姉や姉の友達と、羽根をついて遊んだ事がある。その仲間には私の外にも、私より幾つか年上の、おとなしい少年が交っていた。彼は其^{そこ}処にいた少女たちと、^{こゝろよく}悉 仲好しの間がらだった。だから羽根をつき落したものは、羽子板を譲る規則があつたが、自然と誰でも私より、彼へ羽子板を渡し易かつた。所がその内にどう云う拍子か、彼のついた金^{きん}羽^ば根^ねが、長^{なが}押^げしの溝みぞに落ちこんでしまった。彼は早速勝手から、大きな踏み台を運んで来た。そうしてその上へ乗りながら、

長押しの金羽根を取り出そうとした。その時私は背の低い彼が、踏み台の上に爪立ったのを見ると、いきなり彼の足の下から、踏み台を側へ外してしまった。彼は長押しに手をかけた儘ま、ぶらりと宙へぶら下った。姉や姉の友だちは、そう云う彼を救う為に、私を叱すったり賺かしたりした。が、私はどうしても、踏み台を人手に渡さなかつた。彼は少時しばらく下っていた後、両手の痛みに堪え兼ねたのか、とうとう大声に泣き始めた。して見れば御降りの記憶の中にも、幼いながら嫉妬なぞと云う娑婆界の苦勞はあったのである。私に泣かさされた少年は、その後学問の

修業はせずに、或会社へ通う事になった。今ではもう四人の子の父親になっているそうである。私の家の御降りには、赤ん坊の泣き声に満たされている。彼の家のお降りはどうであろう。(二月二日)

御降りや竹ふかぶかと町の空

夏雄の事

香取秀真かとりほずま氏の話によると、加納夏雄かのうなつおは生きていた時に、百円の月給を取っていた由。当時百円の月給取と云えば、勿論もちろん人に羨まれる身分だったのに相違ない。その夏雄が晩年床に就くと、屢しばしば枕もとへ一面に小判や大判を並べさせては、しけじけと見入っていたそうである。そうしてそれを見た弟子たちは、先生は好い年になっても、まだ貪心たんしんが去らないと見える、浅間しい事だと評したそうである。しかし夏雄が黄金を愛したのは、千葉勝が紙幣

を愛したように、黄金の力を愛したのではあるまい。床を離れるようになったら、今度はあの黄金の上に、何を刻んで見ようかなぞと、仕事の工夫をしていたのである。う。師匠に貪心があると思ったのは、思った弟子の方が卑しそうである。香取氏はこう病牀にある夏雄の心理を解釈した。私も恐らくそうだろうと思う。所がその後或男に、この逸話を話して聞かせたら、それはさもあるべき事だと、即座に賛成の意を表した。彼の述べる所によると、彼が遊蕩を止めないのも、実は人生を観ずる為の手段に過ぎぬのだそうである。そうしてその機微を知ら

ぬ世俗が、すぐに兎や角非難をするのは、夏雄の場合と同じだそうである。が、実際そうか知らん。(二月六日)

冥途

この頃内田百閒氏の「冥途」(「新小説」新年号所載)と云う小品を読んだ。「冥途」、「山東京伝」、「花火」、「件^{くだん}」、「土手」、「豹」等、^{ふしどく}悉く夢を書いたものである。漱石先生の「夢十夜」のように、夢に仮託した話で

はない。見た儘ままに書いた夢の話である。出来は六篇の小品中、「冥途」が最も見事である。たった三頁ばかりの小品だが、あの中には西洋じみない、気もちの好い Pathos が流れている。しかし百閒氏の小品が面白いのは、そう云う中味の為ばかりではない。あの六篇の小品を読むと、文壇離れのした心もちがする。作者が文壇の塵氛じんぷんの中に、我々同様呼吸していたら、到底あんな夢の話は書かなかつたらうと云う気がする。書いてもあんな具合には出来なからうと云う気がする。つまり僕にはあの小品が、現在の文壇の流行なぞに、囚われて居らぬ所

が面白いのである。これは僕自身の話だが、何かの拍子に以前出した短篇集を開いて見ると、何処か流行に囚われていている。実を云うと僕にしても、他人の庶下のきしたには立たぬ位な、一人前の自惚うぬぼれは持たぬではない。が、物の考え方や感じ方の上で見れば、やはり何処か囚われている。

（時代の影響と云う意味ではない。もつと膚浅な囚われ方である）。僕はそれが不愉快でならぬ。だから百閒氏の小品のように、自由な作物にぶつかり、余計僕には面白いのである。しかし人の話を聞けば、「冥途」の評判は好くないらしい。偶たまたま僕の目に触れた或新聞の批評家

なぞにも、全然あれがわからぬらしかった。これは一方現状では、尤ももつとのような心もちがする。同時に又一方では、尤もでないような心もちもする。(二月十日)

長井代助

我々と前後した年齢の人々には、漱石先生の「それから」に動かされたものが多いらしい。その動かされたと云う中でも、自分が此処に書きたいのは、あの小説の主

人公長井代助の性格に惚れこんだ人々の事である。その人々の中には惚れこんだ所か、自ら代助を気取った人も、少くなかった事と思う。しかしあの主人公は、我々の周囲を見廻しても、滅多にいなそうな人間である。「それから」が発表された当時、世間にはやっていた自然派の小説には、我々の周囲にも大勢いそうな、その意味では人生に忠実な性格描写が多かった筈である。しかし自然派の小説中、「それから」のように主人公の模倣者さえ生んだものは見えぬ。これは独り「それから」には限らず、ウエルテルでもルネでも同じ事である。彼等はいず

れも一代を動揺させた性格である。が、如何に西洋でも、彼等のような人間は、滅多にいぬのに相違ない。滅多にいぬような人間が、反って模倣者さえ生んだのは、滅多にいぬからではあるまいか。無論滅多にいぬと云う事は、何処もいぬと云う意味ではない。何処にもいるとは云えぬかも知れぬ、が、何処かにいそうだ位の心もちを含んだ言葉である。人々はその主人公が、手近に住んで居らぬ所に、しようつこう 慟怍の意味を見出すのであろう。そうして又その主人公が、何処かに住んでいそうな所に、慟怍の可能性を見出すのであろう。だから小説が人生に、人間の

意欲に働きかける為には、この手近に住んでいない、しかも何処かに住んでいそうな性格を創造せねばならぬ。これが通俗に云う意味では、理想主義的な小説家が負わねばならぬ大任である。カラマゾフを書いたドストエフスキイは、立派にこの大任を果している。今後の日本では^{そもそも}仰誰が、こう云う性格を造り出すであろう。(一月十三日)

嘲魔

一かどの英靈えいれいを持った人々の中には、二つの自己が住む事がある。一つは常に活動的な、情熱のある自己である。他の一つは冷酷な、観察的な自己である。この二つの自己を有する人々は、ややもすると創作力の代りに、唯賢明な批評力を獲得するだけに止まり易い。M. de la Rochefoucauld はこれである。が、モリエールはそうではない。彼はこの二つの自己の分裂を感じない人間であった。不思議にもこの二つの自己を同時に生きる人間で

あつた。彼が古今に独歩する所以は、こう云う壯嚴な矛盾の中にある。Sainte-Beuve のモリエール論を読んでいたら、こんな事を書いた一節があつた。私も私自身の中に、冷酷な自己の住む事を感じずる。この嘲魔をしりぞ却ける事は、私の顔が変えられないように、私自身には如何とも出来ぬ。もし年をとると共に、嘲魔のみが力を加えれば、私も亦またメリメエのように、「私の友人のなにがしがこう云う話をして聞かせた」なぞと、書き始める事にも倦みそうである。殊に虚無の遺伝がある東洋人の私には容易かも知れぬ。L'Avare や École des Femmes を書い

たモリエールは、比類の少い幸福者である。が、かんさい奸妻に
 悩まされ、病肺に苦しまされ、作者と俳優と劇場監督と
 三役の繁務に追われながら、しかもなほ猶この嘲魔の毒手に、
 陥らなかつたモリエールは、いよいよ愈いよいよ羨望に価すべき比類の
 少い幸福者である。(二月十四日)

池西言水

「言ひ難きを言ふは老練の上の事なれど、そは多く俗

事物を詠じて、雅ならしむる者のみ。其事物如何雅致ある者なりとも、十七字に余りぬべき程の多量の意匠を十七字の中につづめん事は、殆んどほと為し得べからざる者なれば、古来の俳人も皆之を試みざりしに似たり。然れども一二此種の句なくして可ならんや。池西いけにしごんすい言水は実に其作者なり。」これは正岡子規の言葉である。（「俳諧大要」一五六頁）。子規はその後に実例として、言水の句二句を掲げている。それは「姨捨てん湯婆たんぼに爛せ星月夜」と「黒塚や局つぼねおんな女のわく火鉢」との二句である。自分は言水のこれらの句が、「十七字に余りぬべき程の多量の意

匠を十七字の中につづめ」たとするには、何の苦情も持
つて居らぬ。しかしこの意味では蕪村や召波しようはも、「十七
字に余りぬべき程の多量の意匠を十七字の中につづめ」
てはいないか。「御手打の夫婦なりしを衣更へ」や「い
ねかしの男うれたき砧きぬたかな」も、やはり複雑な内容を
十七字の形式につづめてはいないか。しかも「爛せ」や
「わく」と云う言葉使いが耳立たないだけに、一層成功
してはいないか。して見れば子規が評した言葉は、言水
にも確たしかに当て嵌まるが、言水の特徴を云い尽すには、
余りに広すぎる憾みはないか。こう自分は思うのである。

では言水の特徴は何かと云えば、それは彼が十七字の内に、万人が知らぬ一種の鬼気を盛りこんだ手際にあると思う。子規が掲げた二句を見ても、すぐに自分を動かすのは、その中に漂う無気味である。試に言水句集を開けば、この類の句は外にも多い。

御忌おんぎの鐘皿割る罪や暁の雲

つま猫の胸の火や行くにはたづみ 潦

夜桜に怪しやひとり須磨の蜚あま

蚊柱の礎いしづゑとなる捨子かな

ひとだま
人魂は消えて梢の燈籠とうろかな

あさましや虫鳴く中に尼ひとり

火の影や人にて凄き網代守

句の佳否に関らず、これらの句が与える感じは、蕪村にもなければ召波にもない。元禄でも言水唯一人である。自分は言水の作品中、必しもこう云う鬼趣を得た句が、最も神妙なものだとは云わぬ。が、言水が他の大家と特に趣を異にするのは、此処あると云わざるを得ないのである。言水通称は八郎兵衛、紫藤軒と号した。享保四年

歿。行年は七十三である。（二月十五日）

托氏宗教小説

今日本郷通りを歩いていたら、ふと托氏とし宗教小説と云う本を見つけた。価を尋ねれば十五銭だと云う。物質生活のミニマムに生きている僕は、この間渦福うずふくの鉢を買おうと思ったら、十八円五十銭と云うのに辟易した。が、十五銭の本位は、仕合せと買えぬ身分でもない。僕は早

速三箇の白銅の代りに、薄っぺらな本を受け取った。それが今僕の机の上に、古ぼけた表紙を曝さらしている。托氏宗教小説は、西曆千九百有七年、支那では光緒二十三年、香港の礼賢会 (Rhenish Missionary Society) が、剗きけつに付した本である。訳者は独逸ドイツの宣教師 Genähr と云う人である。但し翻訳に用いた本は、Nisbet Bain の英訳だと云う。内容は名高い主奴論しゅどろん以下、十二篇の作品を集めている。この本は勿論珍書もちろんではあるまい。文求堂ぶんきゆうどうに頼みさえすれば、すぐに取ってくれるかも知れぬ。が、表紙を開けた所に、原著者托爾斯泰の写真があるのは、何

なんとなしに愉快である。好い加減に頁を繰って見れば、
 牧色、ムジイク加夫単、カフタン沽未士クミスなぞと云う、西洋語の音訳が出て
 来るのも、僕にはやはり物珍しい。こんな翻訳が上梓さ
 れた事は原著者托氏も知つていたであらうか。香港上海
 の支那人の中には、偶然この本を読んだ為めに、生涯托
 氏を師と仰いだ、若干の青年があつたかも知れぬ。托氏
 はそう云う南方の青年から、はるか遙に敬愛を表すべき手紙
 を受け取りはしなかつたであらうか。私は托氏宗教小説
 を前に、この文章を書きながら、そんな空想を逞しくし
 た。托氏とは伯爵トルストイである。(二月二十八日)

「西洋の民は自由を失った。恢復の望みは殆ど見えな
い。東洋の民はこの自由を恢復すべき使命がある。」こ
れは次手に孫引きにしたトルストイの書簡の一節であ
る。(二月三十日)

印 税

Jules Sandeau の *ゴッパ* が Palais Royal のカッフエへ
行っていると、出版書肆しよしのシヤルパンティエが、バルザ

ツクと印税の相談をしていた。その後彼等が忘れて行った紙を見たら、無暗に沢山の数字が書いてあった。サントオがバルザックに会った時、この数字の意味を問い訊すと、それは著書が十萬部売切れた場合、著者の手に渡るべき印税の額だったと云う。当時バルザックが定めた印税は、オクタヴオ版三フラン半の本一冊につき、定価の一割を支払うのだった。して見ればまず日本の作家が、現在取っている印税と大差がなかった訳である。が、これがバルザックがユウジエニニ・グランデエを書いた時分だから、千八百三十二年か三年頃の話である。まあ印

税も日本では、西洋よりざつと百年ばかり遅れていると思えば好い。原稿成金なぞと云つても、日本では当分小説家は、貧乏に堪えねばならぬようである。(一月三十日)

日米関係

日米関係と云つた所が、外交問題を論ずるのではない。文壇のみに存在する日米関係を云いたいのである。日本

に学ばれる外国語の中では、英吉利語程範圍の広いものはない。だから日本の文士たちも、大抵は英吉利語に手依っている。所が英吉利なり亜米利加アメリカなり、本来の英吉利語文学は、シヨオとかワイルドとか云う以外に、余り日本では流行しない。やはり読まれるのは大陸文学である。然るに英吉利語訳の大陸文学は、亜米利加向きのものが多い。何故と云えばホイットマン以後、芸術的に荒蕪こうぶな亜米利加は、他国に天才を求めらるからである。その關係上日本の文壇は、さ程著いちじるしくないにしても、近年は亜米利加の流行に、影響される形がないでもない。イバ

ネスの名前が聞え出したのは、この実例の一つである。

（僕が高等学校の生徒だった頃は、あの「大寺院の影」の外に、英吉利語訳のイバネスは何処を探しても見当らなかつた）。向う河岸の火の手が静まったら、今度はパピニな

ぞの伊イタリヤ太利文学が、日本にも紹介され出すかも知れぬ。

これは大陸文学ではないが、以前文壇の一角に、愛蘭土アイerland

文学が持て囃されたのも、火の元は亜米利加にあつたようだ。こう云う日米関係は、英吉利語文学が流行しないだけに存外見落され勝ちのようである。偶たまたま丸善へ行つ

て見たら、イバネス、ブレスト・ガナ、デ・アラルコン、

バロハなぞの西班牙スペイン小説が沢山並べてあつたため、こんな事を記して置く氣になつた。(二月一日)

Ambroso Bierce

日米關係を論じた次手に、亜米利加の作家を一人挙げよう。アムブロオズ・ビィアスは毛色の変つた作家である。(一) 短篇小説を組み立てさせれば、彼程鋭い技巧家は少い。評論がポオの再来と云うのは、確にこの点で

も当っている。その上彼が好んで描くのは、やはりポオと同じように、無気味な超自然の世界である。この方面の小説家では、英吉利に *Algernon Blackwood* があるが、到底バイアスの敵ではない。(二) 彼は又批評や諷刺詩を書くと、辛辣無双な皮肉家である。現にレジンスキイと云う、確か波蘭土系ポオランドの詩人の如きは、彼の毒舌に翻弄された結果自殺を遂げたと云われている。が、彼の批評を読めば、精到の妙はないにしても、犀利さいりの快には富んでいると思う。(二三) 彼は同時代の作家の中では、最もコスモポリタンだった。南北戦争に従軍した事もある。

サンフランシスコ

桑 港ロンドンの雑誌の主筆をした事もある。倫敦ロンドンに文を売つ

ていた事もある。しかも彼は生きてか死んだか、未に行方が判然しない。中には彼の悪口が、余りに人を傷けた為め暗殺されたのだと云うものもある。(四)彼の著書には十二巻の全集がある。短篇小説のみ読みたい人は

In the Midst of Life 及び Can Such Things Be? の二巻に就くが好い。私はこの二巻の中に、特に前者を推したのである。後者には佳作は一二しか見えぬ。(五)彼の評伝は一冊もない。オウ・ヘンリー等に比べると、此こ処こでも彼は薄倖である。彼の事を多少知りたい人は、ケム

ブリツヂ版の *History of American Literature* 第二版の三八六―七頁、或は Cooper 著 *Some American Story Tellers* のビィアス論を見るが好い。前に書くのを忘れたが、年代は一八三八―一九一四？である。日本訳は一つも見えない。紹介もこれが最初であろう。(二月二日)

むし

私は「龍」と云う小説を書いた時、「虫の垂衣たれぎぬをした女が一人、建札の前に立っている」と書いた。その後或人の注意によると、虫の垂衣が行われたのは、鎌倉時代以後だそうである。その証拠には源氏の初瀬詣くんだりの条にも、虫の垂衣の事は見えぬそうである。私はその人の注意に感謝したが、私が虫の垂衣云々の事を書いたのは、「信貴山縁起しきさんえんぎ」「粉河寺縁起こかわでらえんぎ」などの画卷物によっていたのである。だからそう云う注意を受けても、剛情に自

説は改めなかつた。その後何かの次手から、宮本勢助氏にこの事を話すと、虫の垂衣は今昔物語にも出ていと云う事を教えられた。それから早速今昔を見ると、本朝の部卷六、ちんぜいよりのぼるのひとかんのんのたすけによりてぞくなんをのがれいのちをじする従鎮西上人依観音助遁賊難持命ものがたり語の中に、「うた転て思すらむ。然れども昼牟子○を風の吹き開きたりつるより見奉るに、更に物不レ思罪免し給へ云々」とある。私は心の舒のびるのを感じた。同時に自説は曲げずにいても、矢張文献に証拠のないのが、今までは多少寂しかつたのを知つた。(二月三日)

落

坂になった路の土が、砥との粉のように乾いている。寂しい山間の町だから、路には石塊も少くない。両側には古いこけら葺の家が、ひっそりと日光を浴びている。僕等二人の中学生は、その路をせかせか上って行った。すると赤ん坊を背負った少女が一人、濃い影を足もとに落としながら、静に坂を下って来た。少女は袖のまくれた手に、茎の長い落をかざしている。何の為めかと思ったら、

それは真夏の日光が、すやすや寝入った赤ん坊の顔へ、
当らぬ為の落であつた。僕等二人はすれ違ふ時に、そつ
と微笑を交換した。が、少女はそれも知らないように、
やはり静に通り返した。かすかに頬が日に焼けた、大様
の顔だちの少女である。その顔が未いにどうかすると、は
つきり記憶に浮ぶ事がある。里見君の所謂いわゆる一目惚れとは、
こんな心もちを云うのかも知れない。(二月十日)

(削除分)

時弊一つ

「彼（一茶）」の結婚生活も決して幸福なものではなかつた。生まれる子供も、生まれる子供も、皆夭折して行くのであつた。（中略）さればこそ、「唯頼め桜はたはたあの通り」と云うような、宗教的な句に対しても、陳腐な感じを起すよりも、寧ろ吾々は何ともいえない厳か

な感じを起すのである。」これは西宮藤朝氏が一茶の生活論じた文章である（「国粹」十二月号所載、「家庭生活の諸相」）が、私は一茶の生活を知ると知らざるとに關らず、この句は一茶の作中でも、見るに堪えない俗句だと思ふ。この句に嚴かな感じを起すと云えば、西宮氏は全然私たちとは、異つた神經の所有者である。しかし単にそれのみなら、私は何も物知り顔に、この句の価値なぞ喋々しない。私が西宮氏を難ずる所以は、時弊の一つが氏の態度に現れていると思ふからである。私の見る所を云えば、西宮氏はこの句を鑑賞する際、一茶の伝記を

知っていたために、眼光が昏んでしまったのである。云わばこの句の正体も極めず、一茶の伝記が句の上に懸けた、円光ばかりを拝んだのである。この態度は宗匠連が、芭蕉の「古池や」を難有がるのと、邪道に墮在した上から見れば、五十歩百歩と云う外はない。これは独り句のみならず、小説でも画でも同じ事である。評家は常に作品にのみ、作品の価値を求めねばならぬ。もし作品の鑑賞上、作家の伝記が役立つとすれば、それは作品が与えた感じに、脚注を加えるだけのものである。この限界を守らぬ評家は、たとい作品の価値如何に全然盲目でない

にしても、すぐに手軽な「鑑賞上の浪漫主義」に陥ってしまう。惹いては知見に囚われる余り、味到の一大事を忘却した、上の空の鑑賞に流れ易い。私はこう云う弊風が、多少でも見えるのを好まぬのである。ユウゴオ、芭蕉、ベエトオフエンなどが軽々に談られるのを好まぬのである。引き合いに出された西宮氏には、気の毒な心地がしないでもない。(二月五日)

日本文学電子図書館

「芥川龍之介随筆集」

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

2014年3月14日 第1刷発行



日本文学電子図書館